

3業務(1)～(5)の関連遺産集約表

【参考資料】

市町村	内訳	関連史跡・人物	場所	内容
奄美市	「西郷どん」ゆかりの地とロケ地	西郷隆盛腰掛の柱	笠利町赤木名	赤木名の仮屋(代官がいる役場)を度々訪れていた西郷は、仮屋の近くで子供達に学問を教えていたと伝えられている。その建物は「学舎」と呼ばれ、中金久集落の集会場として、最近まで使用されていた。学舎の建て替えに伴い、西郷が背もたれに使用したという床柱が新学舎(公民館)に移設されている。
		西郷岩	笠利町崎原	遠島中の西郷隆盛が対岸の龍郷から来ていたといわれていることから「西郷岩」と呼ばれている。
		南洲神社	奄美市名瀬	奄美市名瀬の芦花部集落に所在する神社。神社の起源は、薩摩藩統治時代に、龍郷方出身の田畑佐文仁の弟・佐喜美が、龍郷方の黍横目を務めていた時に、集落の聖地コクナ山の裾野で豊作祈願したのが始まりとされる。その後、幕末の頃、芦花部出身の島役人・浦実が石像を寄進して、礼拝
		芦花部海岸		芦花部の浜にクジラがうちあがった際に、人々はクジラの肉を食料にしたいと思ったものの、役人に怒られるのではないかと手が出せないでいました。そこへ現れた西郷隆盛が、自分が役人に話をつけるからと、クジラの肉を分け与えたという逸話が残っている浜。
		菌家、菌家の庭園	笠利町用安	オモチとトゴラからなる分棟型の住宅をなす菌家住宅は、平成19年に国の登録有形文化財になり、その東側の庭園も奄美市指定文化財となっている。オモチは寄棟造鉄板葺で、主室8畳とネショ、トゴラからなり、ヒキモンと呼ぶ横架材を使う構造で、奄美の伝統的な建築様式を伝えている。 屋敷から一段下がった庭は、山水を引いて池を造り、リュウキュウマツやイヌマキの木を配して、武家屋敷を思わせる庭園となっている。 客人をもてなす際に、この庭で「八月踊り」や宴を催したと伝えられている。 NHK大河ドラマ「西郷どん」のロケ地ともなっており、当時の生活を今に伝える重要なものとなっている。

3 業務（１）～（５）の関連遺産集約表

【参考資料】

白糖工場跡	ウォートルス	奄美市名瀬	今から約150年前、幕末の名瀬港にも23歳のアイランド人青年がやってきた。彼の名前は、トーマス・J・ウォートルス。幕末、薩摩藩は黒糖産地の奄美大島で高価な白糖製造を企て、黒糖から精製する工場建設を計画した。その事業を指揮するために招かれた技師が、ウォートルスである。建築技師としての能力を高く評価されたウォートルスは、奄美大島の用務を終えた後、明治政府に雇用され、お雇い外国人として大活躍した。大阪の造幣局造幣寮（泉布観）、東京の陸軍の竹橋陣営等、数々の建設事業に従事したほか、東京の銀座煉瓦街の建設も、このウォートルスが手がけたものである。奄美大島の事業から出発した23歳の青年技術者は、日本近代建築史の黎明期に「ウォートルス時代」と呼ばれるほどの大活躍を成し遂げ、その名を残している。
	ましゅ		ウォートルが暮らす洋館で家政婦をしていたのが、名瀬塩浜出身の「ましゅ」という女性である。ウォートルスとましゅは、やがて恋人となり、薩摩藩が計画した白糖製造工場4箇所の建設でも行動を共にしていた。ウォートルスが工場建設に従事していた時に、長崎を来訪した記録が残されており（長崎県立図書館）、同伴者として妻と記載されているが、その妻とはましゅの可能性がある。二人の悲恋は、シマウタにも唄われている。
	蘭館山		ウォートルスは、名瀬港を一望できる山の上の洋館で暮らしていた。その山は、「蘭館山」と呼ばれるようになり（奄美・沖縄では、「オランダ」という言葉は「外国」の意味で使われていた）、今日までその名称が伝えられている。
	蘭館橋		ウォートルが暮らしていた「蘭館山」の洋館の登り口に、清流にかかる橋がある。その橋の名称は「らんかん橋」である。シマウタに「らんかん橋」という名曲があり、これまで「らんかん」は橋の欄干の意味と考えられてきたが、最近ではウォートルスとましゅを唄った曲であり、蘭館へ行く橋と理解する説もある。シマウタで唄われている「らんかん橋」が、名瀬のこの「らんかん橋」に該当するのか、確定できるわけではないが、有力な仮説である。

3業務(1)～(5)の関連遺産集約表

【参考資料】

		白糖工場跡	<p>幕末の慶応元年から慶応3年にかけて、奄美大島の瀬留(龍郷町)・金久(奄美市名瀬)・須古(宇検村)・久慈(瀬戸内町)の4箇所に、当時の最新設備である蒸気機関を導入した「白糖製造工場」が建設された。薩摩藩は、黒糖の一大産地である奄美大島で、黒糖から白糖を精製する大規模な工場建設を計画したのである。グラバー商会とオランダ商人ボードエンから蒸気機関の製糖機械4台を購入、二人の外国人技術者を招聘して、黒糖よりも高価な白糖の製造に取り組んだ。金久に建設された工場は、現在の名瀬矢之脇町にある有村倉庫一带に当たる。裁判所から有村倉庫の沿って流れる矢之脇川の屈曲部分は、蒸気機関の精製機を使うために水路として流路を人為的に変えたと考えられるものである。</p>
		白糖石	<p>幕末の慶応元年から慶応3年にかけて、奄美大島の瀬留(龍郷町)・金久(奄美市名瀬)・須古(宇検村)・久慈(瀬戸内町)の4箇所に、「白糖製造工場」が建設された。その工場建設に従事した石工・大工は、熊本・鹿児島から集められた職人たちで、100人余にのぼると伝えられている。工場の基礎等に使われた石材は、熊本・鹿児島から搬入されたもので、瀬戸内町久慈では、民家に転用されたその石材を、地元の古老が「白糖石」と呼んでいた。工場廃止後、石材は、学校等の公共施設や有力家の庭や壁に転用されている。</p> <p>名瀬の金久に建てられた工場に関わる石材は、工場跡地の周辺では、金久町の恵絹織物工場の塀、蘭館山公園の登り口、矢之脇町の公園隣にある個人宅の塀等で見ることができる。また奄美市立名瀬小学校の敷地内の各所にも散見され、戦後の日本復帰運動所縁の地として市の文化財指定も受けている石段にも、その石材が転用されている。</p>

南島雑話	『南島雑話』	<p>『南島雑話』とは、嘉永 3 年(1850)から安政 2 年(1855)にかけて、奄美大島の名瀬間切小宿村に滞在した薩摩藩士・名越左源太が、幕末の奄美大島の自然・歴史・文化の全般にわたり見聞をまとめた彩色挿絵入民俗誌である。当時の衣食住や行事等、暮らしの様子等を詳細に知ることができる貴重な史料である。著者の名越左源太は、薩摩藩内の藩主後継者争い（お由羅騒動）で咎めを受け、奄美大島に配流されている。一部の草稿を除いて、『南島雑話』そのものの原本とされる史料の存在は確認されておらず、写本群が中心となる。『南島雑話』の史料名称は、さまざまな写本群に対する後世の総称として用いられているもので、『南島雑話』と呼ばれている写本は、実際には「南島雑話」以外の史料を含む複数の巻から構成されている。（両者を区別するため、総称としての『南島雑話』には二重鍵括弧を、個別の巻の史料名称は「大嶋窺覧」「南島雑話」等の一重鍵括弧を使い分けて表記しておく）『南島雑話』の代表的写本としては、鹿児島大学附属図書館本、奄美博物館本、東京大学史料編纂所本の 3 組が知られている。鹿児島大学附属図書館本は「南島雑話一」「南島雑話二」「南島雑話三」「南島雑話四」「南島雑話五」の 5 巻、東京大学史料編纂所本は、「大嶋窺覧全」「大嶋便覧全」「大嶋漫筆全」「南島雑記全」「南島雑話自一至二」「南島雑話三」「南島雑話附録全」の 7 巻、奄美博物館本は「大嶋窺覧・大嶋便覧・大嶋漫筆」「地理纂考・通昭録・南島雑記」「南島雑話全」「南島雑話附録全」「川辺郡七島記」の 5 巻から構成されている。最近の研究成果から、「南島雑話附録」は、文政 12 年（1829）に大島に派遣された御薬園方見聞役の伊藤助左衛門による記録を転写したものであることが確認されている。こうした『南島雑話』をはじめとする一連の史料は、幕末、薩摩藩が奄美大島の様子を詳細把握しようとしていたことや、殖産興業に関わる物産の詳細記録を作成していたことを示すもので、当時の歴史的背景を窺い知る史料としても重要である。</p>
------	--------	---

		奄美博物館本 「南島雑話」	奄美市名瀬	<p>奄美博物館本「南島雑話」は、「大嶋窃覧・大嶋便覧・大幡漫筆」「地理纂考・通昭録・南島雑記」「南島雑話全」「南島雑話附録全」「川辺郡七島記」の 5 巻から構成されている写本群である。</p> <p>奄美市指定文化財（平成 3 年（1991）5 月 22 日指定）。九州大学名誉教授・永井昌文氏（故人）が所蔵していたもので、「永井家本」としてその存在が知られていたが、平成 3 年（1991）1 月 12 日、永井昌文氏が奄美博物館にて講演した際に、名瀬市（当時）に寄贈、市の指定文化財となる。後に全冊について、修復・裏打ち作業を実施している。</p> <p>奄美博物館本に関しては、「南島雑記」が『薩隅日地理纂考』のトカラ列島関係部分及び『通昭録』の奄美関係部分の抜粋から成り、またトカラ列島について詳述した『川辺郡七島記』が含まれている点が、他の写本群と相違する点である。『南島雑話』の巻は、東京大学史料編纂所本とほぼ同内容のものである。</p>
		名越左源太	奄美市名瀬	<p>名越左源太（なごやさげんた）時行（ときゆき）（時敏ともいい、後には泰蔵と改名する）は、薩摩藩の番頭兼御側用人，小姓組番頭兼御軍役奉行，社寺奉行，大番頭などの要職を歴任した上級の武士であるが，文武両道に優れ，和歌や書画のほか，医術や本草学にも通じていた教養人でもある。文政 2 年（1819）に生まれ，明治 14 年（1881）6 月 16 日，62 歳で死去した。</p> <p>嘉永 2 年（1849）に起きた薩摩藩のお家騒動（高崎崩れ，お由羅騒動）に連座した責任で流刑に処せられる。嘉永 3 年（1850）～安政 2 年（1855）まで奄美大島の小宿集落に謫居していた。流刑中の左源太に嘉永 5 年（1852）、「嶋中絵図書調方」の役目が命じられ，奄美の自然や生活・文化について詳細な調査・記録を行ない，図解民俗誌を著した。これが「南島雑話」である。</p> <p>左源太には二男・二女の子供がおり，長男の時成（ときなり）は，慶応元年（1865）2 月，第一回薩摩の英国留学生となり，三笠政之介と変名して洋行，翌年の 7 月に帰国。時成は，明治初期に奄美大島に居住，大島郡伊津部村の武實三の娘・ヨシマツと結婚，後に帰鹿し，二男・二女の子供をもうけている。</p>

	小宿村		大島七間切（笠利・名瀬・古見・住用・屋喜内・東・西）のひとつ、名瀬間切に所在する小宿村は、薩摩藩内の藩主後継者争い（お由羅騒動）が起きた際、『南島雑話』の著者として知られる藩士・名越左源太が配流され、暮らした場所である。現在の奄美市名瀬大字小宿に当たる。
	藤由気・嘉美行・亀蘇民		名越左源太が暮らした名瀬間切小宿村の住居は、小宿村出身の島役人・藤由気が所有するもので、左源太の遠島生活を世話したのが藤由気である。左源太から学問の指導を受けた優秀な若者として、藤由気の養子・嘉美行（朝仁の加勇田家の先祖に当たる）や小宿村の有力家の亀蘇民（小宿の稲家の先祖に当たる）等がいる。
	柏 有度		柏有度は、知名瀬集落の出身で、奄美諸島で薩摩藩が苛酷な糖業政策をしていた中、製糖能率を上げるべく、従来使われていた製糖圧搾者の改良に苦心をかさねました。そして圧搾する木製輪を鉄製に改良することに成功したのです。有度の功績は長く人々に語り伝えられ、明治時代に追賞され、知名瀬集落にある墓碑の隣に石灯籠が建てられました。また、新しい産業振興にも関心を持ち、各種の柑橘類やバンシロウ（グアバ）は、彼が中国から持ち帰り広めたものであるとも伝えられています。
	柏家の墓地		
	師玉 当 济 （清 当济）	奄美市住用	師玉当济は、薩摩藩統治時代の与人（当時の行政単位「間切」の最高役職）で、もともとは、現在の瀬戸内町清水の出身。文武両道の達人として知られ、妖術を使うことができたとも伝えられている。奄美大島で大飢饉が発生した際に、当济は藩の御蔵に貯蔵されている蔵米を取り出し、困窮していた住民たちに与え、大飢饉を乗り越えた。この事件のため、当济は与人を免職となりますが、その後も住民のために尽くし続けました。晩年は見里村（現在の奄美市住用町見里）で暮らし、文化 13 年（1816 年）にその生涯を終えました。当济の墓は、見里集落背後の小高い場所にある師玉家一族の墓地の中にあり、今も集落の人々を見守り続けています。
	師玉家の墓地		

	大島古図		<p>1840(天保 11)年に起こったイギリスの清国侵略戦争である「アヘン戦争」が起こり、国際情勢に対応する一つとして、幕府は 1842(天保 13)年、1849(嘉永 2)年、「海岸防備」の強化を図り、海岸絵図等の作成を各藩に命じました。琉球においては、イギリスやフランスが来琉、通信・貿易・布教を求めてきました。藩は幕府の命令を受けて、当初は警護のために 128 名を琉球へ派遣しました。奄美については、1851(嘉永 4)年、琉球在番として琉球へ滞在していたことがある守衛方物頭の汾陽次郎右衛門ら一行を①大島までの派遣、②藩主・斉彬の領内沿岸巡視、海岸諸要所台場の強化という海岸防御策方針が実施され、「大島古図」を作成させました。</p>
琉球寫真景	琉球寫真景	奄美市名瀬	<p>「琉球寫真景」とは、縦：42cm、長さ：約 14m の絵巻物です。19 世紀前半頃(1830 年頃か?)、岡本豊彦(おかもととよひこ)という画家が奄美を中心に描いたものです。11 景からなっており、名瀬湾の景観や集落の景観、輪踊り(奄美の八月踊りと思われる)の風景、製糖風景、相撲の風景、焼内湾(宇検集落、枝手久島、加計呂麻島)の風景が描かれています。1987(昭和 62)年 3 月に福岡県の旧家から発見され、琉球新報社を介して沖縄県名護市(名護博物館)に寄贈されました。1992(平成 4)年 11 月に名護市指定文化財(有形文化財(絵画))となって、名護博物館で大切に保管されています。</p>
	岡本 豊彦		<p>岡本豊彦(安永 2 年～弘化 2 年、1773～1845)は、江戸時代後期の四条派の画家です。備中窪屋郡水江村(現在の岡山県倉敷市)に生まれました。字名を子彦(しげん)といい、若い頃から黒田綾山(くろだりょうざん)に画を学び、19 歳の時に大阪の福原五岳(ふくはらごがく)に師事します。26 歳の時に上洛(京都に行き)、四条派の呉春(ごしゅん)に師事します。山水画を得意とし、雲、山、水月、泊まり舟を描く画法にその特徴があります。岡山県立博物館や岡山県立美術館に所蔵されている襖絵や屏風絵などが代表作として有名です。72 歳の時、大和地方を旅行中に病死しました。</p>

		<p>名瀬港全景 (第1景)</p>	<p>「琉球寫真景(りゅうきゅうとうしんけい)」・第一景は、蘭館(らんかん)山の頂上付近(通称:朝仁平(あさんびら))から眺望した名瀬湾及び名瀬の街の景観を描いています。</p> <p>右端には「おがみ山」、そして金久の街並み、正面手前は現在の矢之脇町で、「仮屋(かりや)」(薩摩藩の出先機関。)が描かれています。(現在、検察庁・裁判所・大島拘置所等のある一帯。)</p> <p>「仮屋(かりや)」は六つあり、左から「實久仮屋(さねくかりや)」、「宇検仮屋(うけんかりや)」、「本仮屋(ほんかりや)」、「東仮屋(ひがしかりや)」、「瀬名仮屋(せなかりや)」、「笠利仮屋(かさりかりや)」が描かれています。</p> <p>参考資料:「鹿児島県名瀬港」(1914(大正3)年10月重信印刷所発行, 林蘇喜男氏所蔵)</p>
		<p>伊津部仮屋 (第1景)</p>	<p>薩摩藩統治時代の島本島の行政区は、「笠利間切(かさりまぎり)」に(笠利方(かさりほう))と赤木名方(あかきなほう)、「名瀬間切(なせまぎり)」に龍郷方(たつごうほう)と名瀬方(なせほう)、「古見間切(こみまぎり)」に瀬名方(せなほう)と古見方(こみほう)、「住用間切」に住用方と須垂方(すたるほう)、「焼内間切(やきうちまぎり)」に大和浜方と宇検方、「西間切」に西方方(にししかたほう)と実久方(さねくほう)、「東間切(ひがしまぎり)」に度連方(どれんほう)と東方(ひがしほう)の七つの「間切り(まぎり)」に分けていました。各「間切」には二つの「方(ほう)」がおかれました。</p> <p>「琉球寫真景(りゅうきゅうとうしんけい)」には、六つの「仮屋」が描かれていますが、「名瀬間切」と「住用間切」を管轄する「仮屋」は、「本仮屋(ほんかりや)」に統合されていたのか、あるいはどちらかの「仮屋」が別の場所にあったのか、よくわかっていません。これらを総称して「伊津部仮屋」と呼称していたようです。</p> <p>薩摩藩統治時代の当初は、赤木名を主体として大熊と交互に仮屋を置いていましたが、1,800年に伊津部仮屋に固定化して名瀬の街が大きくなっていきました。</p>

	八月踊り (第6景)		<p>八月踊り(輪踊り)の風景を描いています。</p> <p>奄美の八月踊りは、旧暦八月の「アラセツ」の日(最初の丙の日)から「シバサシ」(7日後の壬の日)の日まで七日七晩集落を挙げて踊り明かします。</p> <p>また、その後の甲子(キノエ・ネ)の日を「ドゥンガ」と呼び、この三つの節目の日には集落の広場(ミヤー)で大きな輪になって、「チヂン」と呼ぶクサビ締め(クサビ締め)の太鼓のリズムと男女の掛け合いの唄に合わせて踊ります。足捌き、手踊りが特徴的で、興じてくるとテンポも速まり、熱狂的な踊りになります。</p> <p>女性がチヂン(クサビ締め)の太鼓を叩いていることから奄美大島北部での「八月踊り」を描いたものと考えられます。</p>
	御殿浜奉納相撲 (第10景)		<p>広場での相撲の様子が描かれています。沖縄相撲とは異なった相撲の様子です。</p> <p>奄美大島では、旧暦八月十五日、あるいは九月九日に各集落単位で豊年相撲が盛大に行われます。集落の広場(ミヤー)に土俵を築き、トネヤで祈願をしてから相撲が行われます。観客と力士は手前側と奥のほうに二手に分かれている様子から、集落を二分しての対戦、あるいは集落対抗の対戦ではないかと推測されます。</p> <p>左奥にお膳を頭上に上げた一行が描かれているのは、相撲の合間に行われる「中入り」の一行ではないかと推察されます。左側の川の近くに小屋が描かれています。小屋の中の様子は描かれていませんが、役人あるいは集落の要人、ノロの人たちがいるのではないかと思います。</p>
教会	大笠利教会	奄美市笠利	可能
	佐仁教会		可能
	屋仁教会		可能
	赤木名教会		可能
	平教会		可能
	手花部教会		可能
	喜瀬教会		可能
	芦花部教会	奄美市名瀬	可能
	大熊教会		可能
	浦上教会		可能
	和光園教会		可能
	名瀬聖心教会		可能
	名瀬聖マリア		可能

		教会		
		小湊教会		可能
		小宿教会		可能
		知名瀬教会		可能
		根瀬部教会		可能
		山間教会	奄美市住用	可能
大和村	「西郷どん」ゆかりの地とロケ地	桂 久武	大和浜	西郷隆盛を指示し、親交も深かったと言われている。西郷と時期は違えど、奄美大島に守衛方として2年間住んでおり、居住地が現在の大和村役場の裏の辺りと言われている。
		宮古崎 (ササント)	大和村国直	大河ドラマ「西郷どん」のタイトルバックで一躍有名になった。日中から夕日が見える時間まで観光客が絶えない。本編のロケ地ともなっている。 ここのリュウキュウチクは昭和の中頃まで高倉や住居の屋根材として大和村で利用されていた。奄美群島国定公園第3種
		群倉	大和浜	奄美の原風景として西郷どん紀行で紹介された。昔は島内のあちこちに群倉が見られたそうだが現存するのは大和浜のみ。県の文化財に指定されている。現在は芦やススキを材料に屋根を葺いているが、従来のように宮古崎のリュウキュウチクを使おうと再生事業を教育委員会で取り組んでいる。
白糖工場跡	磯平パーク	大和村戸円	直川智翁が中国から持ち帰った3本のサトウキビの苗を植えたと言われている場所に公園を作り「サトウキビ」発祥の地の石碑を建てた。石碑は西郷どん紀行で紹介された。	
	開饒神社・ 高千穂神社・ 巖島神社	大和村思勝	開饒神社はサトウキビの祖とされる直川智翁を祀った神社。西郷どん紀行で紹介された。 高千穂神社には、昔、黒糖を運ぶ港が大和村にあり、船乗りの海上安全を祈願してご神体と手水鉢が山川町より送られたとされており、現存している。思勝(現在のドライブインママ辺り)には黒糖を保管する倉庫が並んでいたとのこと。	
	太 三和良の 墓所	大和村大和浜	役場裏にある墓。山川石で造られている。 三和良は当時の屋喜内間切横目の嘉和知に付き従って、黍植付、製糖法を琉球から取得した。	
	直川智翁生誕 の地		群倉横の住居が直川智翁発祥の地と言われている。十数年前まで看板が立っていたが、台風被害で倒壊し、その後、看板は立てていない。	

3業務(1)～(5)の関連遺産集約表

【参考資料】

	南島雑話	糖業発祥の地	大和村大和浜	大和浜西浜原に黍を植付け、試作で砂糖を生産し、それから糖業が大島に流行して行ったことが記録されている。
	琉球寫真景	沖から見た集落の絵	大和村名音	いくつか似たような集落景観はあるが、名音集落の景観とも考えられる。
	教会	大和教会		可能
		大棚教会		可能
		戸円教会		可能
宇検村	白糖工場跡	白糖工場跡地	宇検村須古	須古集落内蔵戸川近辺。
		白糖石	宇検村須古	民家の石垣に使用されている。
	南島雑話	ノロ衣装等	宇検村湯湾	生涯学習センター「元気の出る館」にて展示。
		芭蕉の群生地	宇検村屋鈍方面	集落へ向かう県道沿いに群生が見られる。
	琉球寫真景	枝手久島を望む絵	宇検村宇検	宇検集落と枝手久島が描かれている。
		厳島神社	宇検村宇検	宇検集落の入口にあり、近辺から描かれたと考えられる。
教会				
瀬戸内町	「西郷どん」ゆかりの地とロケ地	重野安繹	瀬戸内町阿木名	重野安繹は、1827(文政10)年鹿児島郡坂本村に生まれた。若いころから学問に秀で、藩費を受けて江戸で学問を修めるほどでしたが、帰藩してまもなく、同僚の使い込みにより罰を受け、31歳の時に遠島になります。重野の乗った船は久慈に着き、上陸後、勝浦を経て阿木名に移り住みます。重野は阿木名の有志達に請われて、青少年に学問を教える為の私塾を、阿木名の海沿いの地に開きました。漢文の歴史書を教えるなどその名声は近隣の村々にも及び、阿木名は優秀な人材を輩出する「学者村」などと呼ばれました。当時、重野は龍郷に遠島中であった西郷隆盛とも旧交を温め、相互に訪問しあっていました。6年余りの阿木名での生活の跡、許されて帰藩した重野は、西郷隆盛の後任の御庭役となり、生麦事件を発端とする薩英戦争の終結にむけて、イギリスと談判し決着へと導きました。その後、歴史家、漢学者として考証史学(歴史)の学問を深め、日本の近代史学の礎を築きました。日本ではじめての文学博士。東京帝国大学名誉教授。1910(明治43)年没、享年84歳。

3 業務 (1) ~ (5) の関連遺産集約表

【参考資料】

白糖工場跡	白糖工場跡地	瀬戸内町久慈	1865 (慶応元) 年、薩摩藩は島津久光公の代に、外国人技師オーストロス、マキンタイラーを招き、外国製の蒸気機関 4 組を購入して白糖製造を始めた。これは当時、黒糖の値が下がったのを打開する為の策であったと言われている。工場は、瀬戸内町の久慈をはじめ、奄美市名瀬金久、宇検村須古、龍郷町瀬留の四ヶ所に建て、藩史 7 名、英通弁 (通訳) 1 名、医師 1 名、人夫 120 名が来島し、3 年かけて建設を終え、操業を開始した。久慈の製糖工場の機械はオランダ製で、他 3 カ所はイギリス製であった。今は地上に構造物は確認できないが、平成 28~29 年度に発掘調査が行われ、工場の基礎等が残っているのが確認されている。
	白糖石	瀬戸内町久慈	幕末に建設された「白糖工場」の基礎に使われた基礎石を「白糖石」と呼んでいる。奄美大島では産出しない凝灰岩であり、鹿児島から運ばれた石材と考えられる。元々は、工場の基礎として使われていたが、現在は家の塀や敷地の境界などに使用され、久慈集落のあちこちで見ることが出来る。同様に、工場で作っていた赤煉瓦や耐火煉瓦も散見することが出来る。
南島雑話			
琉球寫真景			
教会	古仁屋教会	瀬戸内町古仁屋	可能
	西阿室教会	瀬戸内町西阿室	西阿室カトリック教会は、1955 (昭和 30) 年ころに、名瀬 (現奄美市) から来島したゼローム神父等の宣教活動によって 100 名近くが入信、この地に教会が建てられた。現在も安置されている約 30 cm のマリア観音像は、出征した兵士が中国から持ち帰ったもので、仏像とマリア像の混合した独特な雰囲気漂わせている。
龍郷町 「西郷どん」ゆかりの地とロケ地	西郷南洲流謫跡	龍郷町龍郷	西郷が愛加那と生まれてくる子どものために建てた家。ここでは、西郷ゆかりの品や勝海舟が碑文を書いた石碑を見ることができる。
	西郷隆盛顕彰碑	龍郷町龍郷	西郷南洲流謫跡の文面で触れているので必要なし
	西郷松跡地	龍郷町久場	西郷隆盛 (菊池源吾) が龍郷へ潜居になった際に、その舟のとも綱を結んだ松があった場所。平成 23 年に枯死のため、伐採。その松を使い西郷隆盛・愛加那の木彫を作り龍郷町生涯学習センターりゅうがく館に展示ししてある。

3業務(1)～(5)の関連遺産集約表

【参考資料】

	愛加那の井戸 (イジュンゴ)	龍郷町龍郷	西郷が愛加那のために用意した田畑の目の前にある古井戸。生活には無くてはならない命の湧き水として古くから集落の人々に使われてきた。
	西郷隆盛 2 番目の潜居地	龍郷町龍郷	西郷隆盛 2 番目の潜居地。奄美大島で最も家柄の良い郷土格の本家に住んでいた。ここで 2 年 8 ヶ月程住み、愛加那と暮らしていた。長男菊次郎が誕生した場所。
	笹森 儀助	龍郷町龍郷	笹森儀助は元大島島司で、西郷遺跡記念碑建立運動を起こした人物。南洲流謫跡にある勝海舟の碑文は笹森の働きかけによって実現した。
白糖工場跡	白糖工場跡地	龍郷町瀬留	慶応元(1865)年薩摩藩は、奄美大島の4か所(龍郷町瀬留、奄美市名瀬金久、宇検村須古、瀬戸内町久慈)に白糖工場の建設を実施するため、アイルランド人建築技師トーマス・ウォートル、オランダ人製糖技師マッキンタイラーを招いた。龍郷町瀬留の工場はわずか1年で廃業したが(燃料となる石炭不足のため)、工場に使われていた煉瓦が現在も残っている。
	白糖石		必要なし
南島雑話			
琉球寫真景			
教会	赤尾木教会		可能
	大勝教会		可能
	瀬留教会		教会聖堂及び隣接する司祭館は国の登録有形文化財 観光可
	龍郷教会		可能
	安木屋場協会		可能
	嘉渡教会		可能
	秋名教会		可能